# 会話における割り込みについての分析
## ――日本語母語話者と中国人日本語学習者との会話の特徴――

劉　　佳　珺

# A Study on Interruptions in the Conversations: To Demonstrate the Features of the Conversation between Japanese Native Speakers and Chinese Japanese Learners

LIU Jiajun

This study aims to investigate the features of interruptions in small group conversations by Japanese native speakers (JNSs) and Chinese Japanese learners (CJLSs). This study will demonstrate the features of interruptions from the point of view of position and function. The position of interruption was classified into "at the beginning of turn", "subject", "predicate", and "dependent clause". And the function of interruption was classified into "interruption in the floor of the previous speaker" that includes "supplementation", "comment", "question" and "preoccupation", and "interruption which creates a new floor" that refers to "a new topic."

The participants of each group were two Japanese native speakers and two Chinese Japanese learners. The topics of the discussion were "What should you study in the graduate level?" and "How about the life at the graduate level?" The final results indicate that,

(1) From position of interruption, it shows that interruption in "subject" was 20.00% and in "predicate" was 65.45% by the JNSs. Clearly the interruption concentrated on the "predicate". On the other hand, the interruption by the CJLSs was 35.62% in "subject" and 43.83% in "predicate". The interruption concentrated on both positions.

(2) From function of interruption, there were high frequencies of the "interruption in the floor of the previous speaker" (it refers to "comment", "question" and "preoccupation") by the JNSs. Inter-

rupter tended to share the floor with the previous speaker via the interruption. On the side of CJLSs, they highly tended to create a new floor through interruption.

**キーワード：** 接触場面、割り込み、日本語母語話者、日本語学習者、フロア

## 1. はじめに

本研究では会話の割り込みに関して、「位置」と「機能」という観点から考察する。会話においてある話し手が話をしている最中に、別の話し手が割り込んでその話をさえぎることがある。このような会話の割り込みは日本語母語話者同士でも生じるが、その場合は必ずしも会話を妨害するだけでなく、会話を促進する効果もある（藤井・大塚（1994）、町田（2002）、劉（2011））。しかし、日本語学習者による割り込みは日本語母語話者同士の場合に比べ、会話の妨害をすることが多いことが指摘されている（木暮 2002）。これに関し、従来の研究は「割り込み発話の役割」という観点から分析されてきたものが多い。これに対し、本研究では学習者は単に割り込みの数が多いだけでなく、割り込みの生じる位置が日本語母語話者に比べ、「発話文の冒頭」と「主部」に多く生じていることを指摘する。このことから、学習者の割り込みは相手の発話を補助するより自分の発話を優先させるため、母語話者の割り込みに比べて不快に感じられやすいと考える。その結果は、異文化交流に貢献すると考えられる。

本研究は日本語母語話者 2 名と上級中国人日本語学習者 2 名による 4 人会話（合計 8 組）の自由会話を研究対象とする。母語話者と学習者による割り込みの位置と割り込み発話の機能を分析することによって、日中接触場面における割り込みの特徴を明らかにする。

## 2. 先行研究

本章ではターン及びターンテイキングの観点から割り込みの性質に関する理論と接触場面における割り込みに関する研究を概観してから、本研究の立場を提示し、研究課題を設定する。

## 2.1　割り込みの性質

Sacks, Schegloff & Jefferson（1974）によると、ターンとは会話における発話の順番のことである[1)]。ターンの移り変わりを話者交替と呼ぶ。その話者交替（ターンテイキング）のシステムでは、会話のやりとりにおいて「一度に一人が話す」のがルールである。「割り込み」はそのルールに違反したものであり、会話において避けられるべき「事故」であると見なされている。しかし、会話の進行において、次話者がいつ、どこで話し始めるかということは次話者の判断に委ねられるものである。先行話者の発話が終わらないうちに次話者が話し始めるという「割り込み」が生じる場合においては、恐らく割り込み話者がその「割り込み」を通じてなんらかの行動を達成しようとするのであろう。

Tannen（1984）では発話の重なりや割り込みは相手に発話への理解、共感及び親密感などを示すものとして捉えられるとされている。つまり、先行発話の途中で割り込んで、質問や評価をして、語りの展開を求めることや先行発話を踏まえて、補足したり、先行話者とともに発話を構築したりして相手の発話を促進する。それによって、相手と自分が共－成員性（co-membership）[2)] を有することを示す一つの方法であると考えられる。

以上のように、割り込みは会話において避けられるべき「事故」であるのか、それとも「共一成員性を有することを示すもの」であるのか。言い換えれば、割り込みが先行話者の発話を妨害するかそれとも促進するかについては、割り込み話者と先行話者の間の言語行動がどのように関わっているのかを分析する必要がある。

## 2.2　日本語母語場面及び接触場面における割り込みの特徴

日本語母語場面における割り込みの特徴を考察するものは藤井・大塚（1994）、町田（2002）と劉（2011）がある。藤井・大塚（1994）は日本語における友人同士の会話に見られる発話の重なりは、妨害というよりも、むしろ会話参加者の同意、共感、関心、理解などを積極的に表現し、会話参加者同士の連帯感を強め、会話を盛り上げ、促進させる協力的な側面を多く持っているということができると指摘している。町田（2002）は初対面

の日本語母語話者同士の会話において、共通知識の共有性を確認し、相手の話を理解・同意できることをすばやく相手に伝えようとするための割り込みが多く使われていると指摘している。劉（2011）は日本語母語話者が相手の発話に割り込む際に、その発話は主に先行発話への補足やコメントであり、つまり、割り込まれた話者と共同で意見を構築する傾向があると指摘している。以上の研究により日本語母語場面において、割り込みは相手の発話を阻害するよりむしろ相手の発話を促進する場合もあることが明らかにされた。ただしどのような位置で生じた割り込みが会話を促進するのか、割り込みが生じた後、割り込み話者と割り込まれた話者がどのように会話を調整するのかについてまだ明らかにされていない。そのため、本研究は「割り込みが生じた位置」、「その位置での割り込み発話が果たす機能」、「割り込み後の会話の調整」を検討し、会話における割り込みの特徴について考察する。

接触場面における割り込みの特徴を考察するものは俣野（1996）と木暮（2002）がある。俣野（1996）では、日本語学習者は母語話者からの先取り、割り込みに対し積極的な聞き返しや訂正を行っていないことがあるとされている。その要因については、会話に参加する母語話者は接触場面性に対する意識とそれによって生じた役割分担（接触場面性に対する意識が強い場合ゲスト・ホストという役割分担）が大きく影響すると指摘されている。ただし、学習者の割り込みに対する捉え方を考察する際に、「ホスト」「ゲスト」という役割分担の観点のほかに、母語話者による割り込みの位置及び割り込み発話の機能を分析したうえで、その割り込みによって学習者の発話がどのような影響を与えられるかを分析する必要がある。また木暮（2002）では、「上級学習者でも調和系（先行発話に対する同意・共感・関心などを表すもの）の割り込みは全く見られず、自己の発話を優先させるための妨害的な割り込みが多く見られたことから、先行発話に対して協力的な働きを行う発話権を取得する方法を身につける必要がある」と指摘している。なぜ学習者による割り込みは会話を妨害してしまうか、学習者がどの位置で、どのような割り込みによって先行発話に影響を与えているかについても考察する必要がある。

### 2. 3　研究の立場と研究課題

先行研究を踏まえて、本研究は日本語母語話者と上級日本語学習者との会話における「割り込み」という現象を研究対象とする。割り込みとは先行話者が話している途中で、次話者が発話を挿入することである。まず割り込み話者が先行発話の産出において、いつ、どこで発話を持ち込んだかを明らかにするために、割り込みが生じた「位置」を考察する。次に、なぜその位置で割り込みが生じたか、割り込み発話と先行発話との関係及び割り込み話者と先行話者の間に達成された相互行為を明らかにするために、割り込み発話の「機能」及び割り込みが生じた後のターンの配分を考察する。具体的な研究課題は以下の 3 つである。

1）　割り込みの位置
2）　割り込み発話の機能
3）　割り込み後の会話の調整

なお、本研究で研究対象とする割り込み発話は先行話者の発話の途中で、次話者が挿入する実質的な発話[3)]のみとする。先行話者の発話に途切れなく促進するあいづち的な発話[4)]は持続する時間が短く、先行発話の産出にほぼ影響がないため、分析対象としない。また、目線や体の動きなどの非言語行動も考察対象としない。

## 3.　研究方法

### 3. 1　調査方法

本研究は日中接触場面（以下「接触場面」）の会話 8 組を分析対象とした。各グループの会話参加者は 4 人（計 32 人）である。それぞれ日本語母語話者（以下「母語話者」）2 名で、中国人日本語学習者（以下「学習者」）2 名である。被調査者全員は日本の大学院に在学している 20 代の学生である。グループを組む際の内訳は次のとおりである。

①　同じ専攻の同じ学年の参加者同士
②　異なる専攻の異なる学年の参加者同士
③　異なる専攻の同じ学年の参加者同士

そのうち、学習者全員は日本語能力試験 1 級に合格し、日本語学習暦は

5 年以上で、在日期間は 3 年未満の留学生である。会話参加者は似た経験を持っていると互いに話しやすいと考えられるため、以下のトピックを与え、それについて 10〜15 分間で話してもらった。

| |
|---|
| 大学院の生活において、あなたにとって学ぶべきことは何ですか。今の大学院生活はどうですか |

被調査者の許可を得た上で、その活動を IC レコーダーとビデオカメラで録音と録画をした。本番のディスカッションを始める前に、お互いに会話に慣れるため 5〜10 分間被調査者たちに自由会話をしてもらい、それも収録した。ディスカッションのみの総収録時間は 86 分 45 秒である。

録音と録画が終わった後、まず、被調査者に録音を聞きながら文字起こしの内容を確認してもらった。次に、割り込みが現れたところの例をすべて取り出し、それぞれの割り込み状況について被調査者に確認してもらった。

### 3. 2　フォローアップ調査の結果

本研究に関するフォローアップ調査の項目及び結果を次のように表示する。

| 被調査者 | 調査項目 | 回答結果 |
|---|---|---|
| 日本語母語話者（16名） | 相手の学習者の日本語能力についてどう思うか | 「ほぼ支障がなく会話がうまく進行できる」（16 名） |
| | 学習者に対し、話し方、言葉遣いや話のスピードなどについて遠慮したことがあるか | 「使った言葉は普段日本人と喋るときに使った言葉とほぼ変わらない」（14 名）<br>「砕けた表現や方言の使用は一応控えているけど、そのほかの言葉遣いは普段と変わらない」（2 名） |
| 日本語学習者（16名） | 相手の日本語母語話者の話についてどのぐらい理解できるか | 「90％〜95％」（12 名）<br>「85％〜90％」（4 名） |
| | 会話の進行においていつ発言すればいいか | 「相手の話を理解するより、話したいときに随時話し始める」（14 名）<br>「相手の話をきちんと理解してから、話し始める」（2 名） |

| | | |
|---|---|---|
| | 発言する際のどのように自分の発話を構築するか | 「頭の中で発言しようとする内容を考えながら発言している」（12 名）<br>「頭で発話する内容をきちんと整理した後で発言する」（4 名） |

## 3. 3　文字化の基準

本研究で使用したトランスクリプトは、好井・山田・西阪（1999）を参考にして、以下のように表示する。

| | |
|---|---|
| 、 | 発話途中の区切りで、後ろがまた発話し続くことを示す |
| 。 | 語尾の音が下がって区切りがついたことを示す |
| [ | 重なりや割り込みの始まりを示す |
| ＝ | 途切れなく言葉もしくは発話がつながっていることを示す |
| - | 直前の言葉が不完全なまま途切れていることを示す |
| **言葉** | 当該箇所の音が大きいことを示す |
| ↑ | 音調が極端に上がっていることを示す |
| ↓ | 音調が極端に下がっていることを示す |
| ( . ) | 極短い間合いで沈黙していることを示す |
| (m.n) | 数字（n）の秒数で沈黙していることを示す |
| . h | 吸気音を示す |
| °　° | これで囲まれた箇所の音が小さいことを示す |
| 言葉: | 直前の音が延ばされていることを示す |
| (　) | 聞き取りができない発話を示す |
| hhh、heh、huh | 笑いを示す |
| 言（h）葉（h） | 笑いながら話すときのように語の中に呼気が含まれることを示す |
| ＞＜ | 話すスピードが急に速くなる部分を示す |
| ＜＞ | 話すスピードが急に遅くなる部分を示す |

## 3. 4　分析の手順

分析の手順として、まず、割り込みが先行発話のどの位置に現れるかによって割り込みの「位置」を分類する。それから、割り込み発話と先行発話との関係によって割り込み発話の「機能」を分類する。母語話者と学習者による各位置と各機能の割り込みの出現頻度を比較する際に、具体的な発話例に基づき、母語話者と学習者による割り込みの特徴を検討する。最後に、割り込みが現れた後のターンの移行状況から割り込み後の会話の調

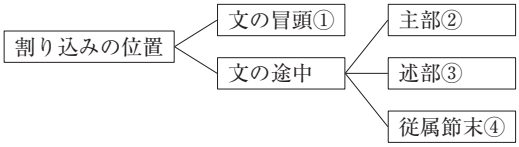
整を考察する。

## 4.　分析と結果

次に割り込みについて「位置」と「機能」からその性質を分析し、さらに母語話者と学習者の割り込みの特徴を比較し、考察する。

### 4. 1　割り込みの位置

発話の重なり[5]及び割り込みの位置について、生駒（1996）はターンの重なりの位置には「発話の頭と頭が重なる場合」、「先行発話の末尾と重なる場合」、「先行発話の途中で重なる場合」の 3 つがあるとしている。以上のように先行研究でターンの重なりの物理的な位置については論じられているものの、発話文[6]において、どこが途中で、どこが末尾かを判断する基準が不明確である。本研究は先行発話文のどの部分で割り込みが生じたということを基準にして割り込みの位置を「文の冒頭」「文の途中」の 2 分類にする。また発話文の構造によって、「文の途中」を「主部」「述部」と「従属節末」の 3 つに分ける。具体的な構成は図 1 のようであり、その用例と特徴を表 1 に示す。




発話文の例

A：えっと①、今日は②雨が降ったけど④、学校へ行った。
③

**図 1**　割り込み位置の分類

**表 1**　割り込み発話の位置（網掛けの部分は割り込み）

| 位置 | | 特徴 | 用例 |
|---|---|---|---|
| 文の冒頭 | | 先行発話文の主部がまだ産出されていないところ（文の冒頭にあるディスコースマーカーやあいづち的な発話の直後）での割り込み | **1J2**[7]：そうだからこうこれ何を勉↑強<br>**2J1**：それぜんぜんぜんぜん違う話しとった。<br>**3C1**：勉強 **heh**。<br>**4J2**：そう、でも[<br>**5C2**：[なにを勉強したいです↑か |
| 文の途中 | 主部 | 先行発話文の主部の直後での割り込み | **1J1**：なるほどねでそういうこと学んでいきたいんだよね。で研究するのは研究したいことはさ[っきのことで、<br>**2C1**：[今知りたい、なぜなぜそういう - その時はその時代はそういうこと書かれてる（.）のか、<br>**3J2**：うん。<br>**4C1**：ということはあの知りたいです。ただ面白いなあと思って |
| | 述部 | 先行発話の述部が産出されている途中での割り込み | **1J1**：えなん - なんでじゃあ：<br>**2C1**：はい。<br>**3J1**：うちらは生物とかもう：<br>**4C1**：はい。<br>**5J1**：植物系なんですが、<br>**6C2**：そうです。<br>**7C1**：はい。<br>**8J1**：なんでわざわざ日本語をなんか世界[<br>**9C2**：[選びましたかとか。<br>**10J1**：難しいって言われてるじゃないですかなんで。 |
| | 従属節末 | 先行発話が複文である場合で、複文の従属節末での割り込み | 〈逆接を表す「が」「けど」の直後〉<br>**1J2**：え入るときにどうしてもこれが研究したいっていう感じで来ました↓が（**0.8**）な[んか、<br>**2J1**：[来ました。<br>**3J2**：来ました↑か<br>**4J1**：来 **h** ま **h** し **h** た **h** [来 **h** ま **h** し **h** た **h** …<br>**5J2**：えなんかわたしぜんぜんそんなんなくてなんかなん - なんとな：く来ちゃった感じなんでな。<br>〈結果を表す「ので」の直後〉<br>**1J1**：僕はもともとこの大学じゃないので[<br>**2C1**：あっ<br>**3C2**：ああ：：<br>**4C1**：そ↓うですか。<br>**5C2**：[えどこ↑の<br>**6J1**：[違う。<br>**7C2**：[どこのだ -<br>**8J1**：○○、○○大学から。 |

### 4. 2　割り込み発話の機能

割り込み発話の機能とは話者が割り込みによって達成しようとする言語行動のことである。割り込み発話の機能に関しては、藤井（1995）、木暮（2002）は割り込みと先行話者の発話権との関係及び割り込み発話のトピックと先行発話のトピックと一致するかどうかによって「調和系」「調整系」「独立系」に分類している。本研究は割り込み話者の言語行動によって、まず割り込み発話の機能を「補足」「評価・感想」「質問・確認」「先取り」「新情報の提示」の 5 種類に分ける。それから藤井（1995）、木暮（2002）の「割り込みと先行話者の発話権との関係及び割り込み発話のトピックと先行発話のトピックと一致するかどうか」という分類基準を参考にして、割り込み発話と先行話者の「フロア」との関係を基準にして割り込み発話の機能を「フロア内での割り込み」と「新たなフロアを築く割り込み」に分類する。フロアとは Edelsky（1981）によると、話し手にとって、話す権利を持っていると認識している時間・空間であるとされている。フロアを所有する会話参加者はターンに関して特定の状況において今何が起こっているのかを認識している。その「何が起こっているのか」というのはトピックまたは機能（からかいや応答を引き出す等）あるいはこの二つの混合を含むものである（高原他（2002、153–158 頁）と中井（2006、87–88 頁）による）。「フロア内での割り込み」とは、割り込み話者が先行話者の発話の途中で、補足や短い感想などの割り込み発話によって、先行話者の発話を補助することを指す。そのような割り込み発話は長く持続しないという特徴を持っている。具体的には「補足」「評価・感想」「質問・確認」「先取り」の 4 つがある。その中で「補足」「評価・感想」「質問・確認」の 3 つは先行話者のすでに産出した発話に対して働きかける発話（「すでに産出された発話に働きかける割り込み」）であり、「先取り」は先行話者がこれから産出しようとする発話を推測し、先に話し出す発話（「産出されようとする発話に働きかける割り込み」）である。「新たなフロアを築く割り込み」とは、割り込み話者が先行話者の発話の途中で、先行話者の発話を踏まえて新しい情報を持ち込むあるいは先行話者の発話とまったく関係ない情報を持ち込むことによって、先行話者から発話権（ターン）を奪い、その後、

常に割り込み発話を中心にして新しいフロアを築き始めることを指す。具体的には「新情報の提示」がある。この 5 種類の機能の関係を図 2 に示す。各機能の特徴及び用例を表 2 に示す。

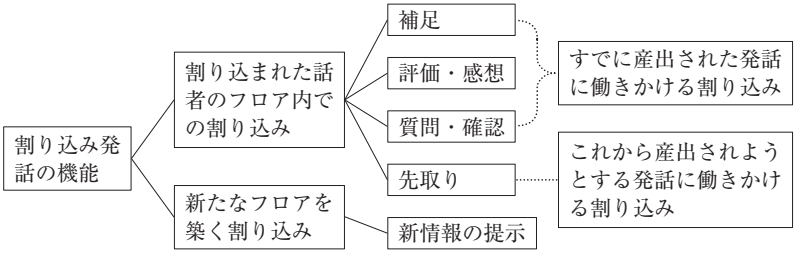



**図 2**　割り込み機能の分類

**表 2**　割り込み発話の機能の分類（網掛けの部分は割り込み）

| 機能 | | | 特徴 | 用例 |
|---|---|---|---|---|
| 割り込まれた話者のフロア内での割り込み | すでに産出された発話に働きかける | 補足 | 割り込みによって、先行発話を言い換えたり、情報を添加したりして先行発話の内容を補足する。その後割り込まれた話者はその補足を踏まえて引き続きフロアを構築する傾向がある。 | **1J2:　今は授業のコマは少ないけ↓ど**<br>**2C1:　うん。**<br>**3J2:　授業外でやること多[いよね。**<br>**4C1:　[発表とかレポートとか。**<br>**5J2:　そうそうそうそう。 自分でやらなきゃ、大学院では（後略）** |
| | | 評価・感想 | 割り込み話者は割り込まれた話者の発話に対し、コメントや感想を示す。その後、割り込まれた話者がその感想やコメントを受けて引き続きフロアを構築する傾向がある。 | **〈評価〉**<br>**1C2:　もともと専門じゃなくて、えっと日本来てから、 日本語を勉強してきて、 日本[語**<br>**2J1:　[。h そ↑うなのめっちゃうまいし：**<br>**3C2:　いえいえいえ、でだんだん日本語に興味を持って（後略）**<br>**〈感想〉**<br>**1C1:　言語を勉強するのか、そ - そっちも必要ですし後はコンピューターの[こと。**<br>**2J2:　[あ heh あれ難しそう。**<br>**3C2:　とかはい。 こういうこと勉強しないと（後略）** |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 割り込まれた話者のフロア内での割り込み | すでに産出された発話に働きかける | 質問・確認 | 割り込み話者は割り込まれた話者の発話に対し、質問や確認を挿入する。その後、割り込まれた話者はその質問や確認に答えた後で引き続きフロアを構築する傾向がある。 | **1C2**：そうですね。いや私のほうはちょっと大学を卒業して仕事に入ったんですよね。仕事をやっている間ちょっと自分が不足しているところは[（.）だんだん<br>**2J2**：[な - なんの仕事ですか。<br>**3C2**：え：となんかえっと日系企業の中でなんか翻訳とかそれをやったんですけれども、<br>**4J2**：うんうん。<br>**5C2**：でそういうときはえっと日本：日本語たぶんだけでなく、日本の社会（後略） |
| | これから産出されようとする発話に働きかける | 先取り | 割り込まれた話者の現発話の内容を受けてその先の内容を予想して発話を挿入する。その後、割り込まれた話者は先取り発話に対し修正したり、先取り発話を踏まえて引き続きフロアを構築したりする傾向がある。 | 〈訂正の場合〉<br>**1C2**：いっしょだが、ただ、ち - ちが - ちがうのは[<br>**2J2**：[あ英語のテスト。<br>**3C2**：英語じゃなくて日本語でした。<br>〈引き続き構築の場合〉<br>**1C1**：だから先生、わ - わたし、大学、の時の日本人の先生、あの中国語がわかる、かどうかはぜんぜんわ[<br>**2J2**：[わからない。<br>**3C1**：わたしわからないです。<br>**4J2**：hhhhh うん。<br>**5C1**：ずっと日本語で。 |
| 新たなフロアを築く割り込み | 新情報の提示 | | 割り込み話者が割り込まれた話者の発話の途中で、先行発話の内容と関連性が弱いかまったく関連性がない新しい情報を提示する。その後、割り込み話者が割り込まれた話者からターンを奪って自分のフロアを構築する傾向がある。 | 〈関連性が弱い新情報の場合〉<br>**1J1**：やっぱり僕ぐらいのところまあそうなのか今でもそうかもしれないんですけど↓大学に入ったらわりと遊ぶものみたいなそういう感覚があって僕もわりと他の人よりは勉強してない[気がします。<br>**2C2**：[修士論文修士論文書くとき今書いてるところなんですね。<br>**3J1**：あっ、まだ書き始めてない。だから、今：わりと一生懸命やってますね勉強。<br>**4J2**：わりとどころじゃないよね。たぶん○○さんめっちゃ勉強しますね。<br>〈関連性がまったくない場合〉<br>（トランスクリプトに該当する実例が見当たらなかった） |

### 4. 3　接触場面における母語話者と学習者の割り込みの特徴

次に母語話者と学習者における割り込みの位置及び割り込み発話の機能の出現頻度について比較する。さらに母語話者と学習者による割り込みの特徴を考察する。

### 4. 3. 1　割り込みの位置と割り込み発話機能の出現頻度

まず 8 組の会話について、母語話者と学習者による各位置の割り込みの出現頻度（表 3）を比較する。次に、母語話者と学習者による各機能の割り込みの出現頻度（表 4）を比較する。最後に各位置の割り込みと各機能の割り込みの関係（表 5）を検討する。

**表 3**　割り込みの位置における母語話者と学習者の出現頻度

| 位置／被調査者 | 文の冒頭（%） | 文の途中 | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 主部（%） | 述部（%） | 従属節末 | |
| 母語話者 | 5（9.09%） | 11（20.00%） | 36（65.45%） | 3（5.46%） | 55（100%） |
| 学習者 | 11（15.07%） | 26（35.62%） | 32（43.83%） | 4（5.48%） | 73（100%） |

各割り込み位置の出現頻度（表 3）について、母語話者は「文の冒頭」が 5 例（9.09%）、「主部」が 11 例（20.00%）、「述部」が 36 例（65.45%）、「従属節」が 3 例（5.46%）のように「述部」に集中している。それに対し、学習者は「文の冒頭」が 11 例（15.07%）、「主部」26 例（35.62%）、「述部」32 例（43.83%）、「従属節」4 例（5.48%）のように「主部」と「述部」の両者に集中している。

**表 4**　割り込み発話の位置と機能における母語話者と学習者の出現頻度

| 機能／被調査者 | フロア内での割り込み | | | | 新たなフロアを築く割り込み | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | 補足 | 評価･感想 | 質問･確認 | 先取り | 新情報の提示 | |
| 母語話者 | 17（30.91%） | 11（20.00%） | 6（10.91%） | 11（20.00%） | 10（18.18%） | 55（100%） |
| 学習者 | 7（9.59%） | 4（5.48%） | 6（8.22%） | 14（19.18%） | 42（57.53%） | 73（100%） |

各割り込み機能の出現頻度（表 4）について、母語話者の場合では、「補足」「評価・感想」「質問・確認」「先取り」のような「フロア内での割り込み」が全体の 81.82%を占め、「新情報の提示」のような「新たなフロアを築く割り込み」は全体の 18.18%しか占めていない。また「フロア内での割り込み」の中で、「補足」は 30.91%で最も多く、「先取り」は 20.00%、

「評価・感想」は 20.00％である。「質問・確認」は 10.91％で最も少ない。それに対し、学習者の場合では、「新たなフロアを築く割り込み」である「新情報の提示」は 57.53％で最も多い。「フロア内での割り込み」における「補足」「評価・感想」「質問・確認」「先取り」の使用頻度は全体の 42.47％を占め、そのうち「先取り」は 19.18％で使用頻度が最も高い。「補足」は 9.59％、「質問・確認」は 8.22％となる。「評価・感想」は 5.48％で最も少ない。

**表 5**　各位置と各機能の割り込みの関係

| 被調査者 | 割り込み発話の機能 | 割り込みの位置 | | | | 合計 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 文の冒頭 | 文の途中 | | | |
| | | | 主部 | 述部 | 従属節末 | |
| 母語話者 | | 5（9.09％） | 11（20.00％） | 36（65.45％） | 3（5.46％） | 55（100％） |
| | 補足 | 0 | 0 | 17 | 0 | |
| | 評価･感想 | 0 | 0 | 9 | 2 | |
| | 質問･確認 | 0 | 0 | 6 | 0 | |
| | 先取り | 0 | 7 | 3 | 1 | |
| | 新情報の提示 | 5 | 4 | 1 | 0 | |
| 学習者 | | 11（15.07％） | 26（35.62％） | 32（43.83％） | 4（5.48％） | 73（100％） |
| | 補足 | 0 | 0 | 7 | 0 | |
| | 評価･感想 | 0 | 0 | 3 | 1 | |
| | 質問･確認 | 0 | 0 | 5 | 1 | |
| | 先取り | 0 | 9 | 4 | 1 | |
| | 新情報の提示 | 11 | 17 | 13 | 1 | |

各位置における割り込みの機能の内訳（表 5）について、「文の冒頭」における割り込みの機能は母語話者も学習者も「新情報の提示」のみである。「主部」における割り込みの機能については、母語話者は「先取り」が多い（11 例のうち 7 例）のに対し、学習者は「新情報の提示」（26 例のうち

17 例）が多い。述部における割り込みの機能については、母語話者は「補足」が最も多い（36 例のうち 17 例）のに対し、学習者は「新情報」の提示が最も多い（32 例のうち 13 例）。

### 4. 3. 2　母語話者と学習者における割り込みの位置と機能の特徴

各位置における割り込みの出現頻度について、母語話者は「文の冒頭」（9.09％）「主部」（20.00％）「述部」（65.45％）「従属節末」（3.46％）というように述部で割り込みが起きやすい。日本語の発話文において、肯定と否定、テンス、アスペクト、ヴォイス、モダリティなどの要素は常に述部に現れる。聞き手にとって、話す内容を的確に捉えるために、先行発話の述部まで聞く必要があると考えられる。そのため母語話者は「文の冒頭」や「主部」での割り込みが少ないと考えられる（例 1）。それに対し、学習者は「文の冒頭」（15.07％）「主部」（35.62％）「述部」（43.83％）「従属節末」（5.48％）というように主部と述部で割り込みが起きやすい。学習者による割り込みは自分の発話を優先させる「新情報の提示」が多いため、そのような割り込みは先行発話の冒頭部や主部で起きやすいと考えられる（例 2）。

（例 1）　母語話者による述部での割り込み
（学習者 C2 が授業中なるべく日本語しか使わないという発話を構築している途中で母語話者 J1 は割り込んでいる。）

**1C2：　できればあのできる限りに日本語でみなさんあの学生さんたちにあのこれの日本語の意味を伝えたいとか、**
**2J2：　うん↓**
**3C2：　ほかの言語は一切使わないほうが言語のあの［（教える）ところ。**
**4J2：　［上達になる。**
**5C2：　そうですね。**

3C2 の発話が「ほかの言語は一切使わないほうが言語のあの」まで産出されている段階で、J1 は C2 がこれから話そうとする内容を予測して、「上達になる」と C2 の発話の述部を補足している。

（例 2）　学習者による主部での割り込み
（母語話者 J1 が学ぶべきことは専攻であることを話している途中で、学習者 C2 は割り込んで「学ぶべきことは専攻ではなく院生生活のことである」と自分の発話を優先させている。）

**1J1：　まあそれを学ぶ。まあ学ぶべきっていうのは［**
**2C2：　［たぶんあのここのあの言っていることはた‐ただし今のなにを専攻しているかどうかの問題ではなくて↓あの：大学院生の生活の中でなにをあなたにとってあの‐あのべん‐まなぶべ‐べきことはなんですかみたいな感じですね。**
**3J1：　ああ：：**
**4C2：　つまり大学院生活ではあなたにとって何を学ぶべきか…**

J1 が大学院で学ぶべきことについて話し始めて、その内容を言う前に、主部「学ぶべきことっていうのは」の部分で 2C2 は割り込み、J1 の発話を中断させている。

各機能の割り込み発話の使用頻度について、母語話者による割り込みは「フロア内での割り込み」に集中している。母語話者がこれらの割り込みによって先行話者の発話を補足し、先行話者とともに会話を進めていくことがある（例 1）。また、母語話者は話題を継続するために、「補足」「評価・感想」「質問・確認」と「先取り」のような「フロア内での割り込み」によって共通の経験を探ったりして、相手と自分が共―成員性を有することを示すこともある（例 3）。それに対し、学習者による割り込みの多くは「新たなフロアを築く割り込み」である。学習者が割り込みによって、相手の発話を中断し、新たにフロアを築く傾向があると考えられる（例 4）。

（例 3）　母語話者による「共－成員性を有する」ことを示す「フロア内での割り込み」
（学習者 C2 が自分の取っている授業についての発話を構築している途中で母語話者 C1 は割り込んでいる。）

**1C2**:　**○○研究科の○○先生の授業を**[
**2J1**:　[**ああ**：：**取ってます、取ってます大変勉強になりますね。**
**3C2**:　**そうですね。で本当に先生すごいですなあと思ってます。**

2J1 は 1C2 の発話「○○先生の授業を」の後ろの内容を先取りし、「取ってます、取ってます…」と C2 に共通の経験を示している。その後 3C2 はその割り込み発話を踏まえて会話を展開し始めている。

（例 4）　学習者による「新たなフロアを築く割り込み」
（母語話者 J1 が学ぶべきことは自分の専門であるという発話を構築している途中で学習者 C2 は割り込んでいる。）
**1J1**:　**学ぶべきことって、ぼく：は普通に自分の専門（.）って**[**いうか、**
**2C2**:　[**でご専門はなんですか**
**3J1**:　**日本語教育です。**
**4C2**:　**ああす：ごいですね将来、中国とかほかの国に行ったりはするんで-しますか↑**
**5J1**:　**あ今までず：と**
**6C2**:　**ほう：た-すごいですね。**

1J1 が「学ぶべきことは自分の専門である」という内容を話そうとするところで、2C2 は「ご専門はなんですか」と割り込んで J1 からターンを奪い、その後 J1 の専門について話を展開し始めている。この傾向はフォローアップ調査の「相手の話を理解するより、話したいときに随時話し始める（16 名の内 14 名）」という結果にも関わると考えられる。

また、各位置と各機能との関係について、「主部」における割り込みの機能の場合、母語話者は「先取り」が多いのに対し、学習者は「新情報の提示」が多い。母語話者は先行発話の主部の内容に基づき、その後ろの発話を先取りして、先行話者のフロア内で先行話者とともに会話を進めていく

場合もある（例 3）。また学習者が発話の途中で言いよどんだ際に、その後ろの発話を先取りして学習者を補助する場合もある（例 5）。それに対し、学習者は先行発話の主部で割り込んで、先行発話との関連性が弱い発話を持ち込んで、新たなフロアを築くということが見られた（例 2）。また、述部における割り込みの機能の場合、母語話者は「補足」が最も多いのに対し学習者は「新情報の提示」が最も多い。それについて、母語話者が先行発話の述部で割り込んで先行話者とともにフロアを築く（例 1）のに対し、学習者は先行発話を最後まで聞かずにその述部で　割り込んで新しいフロアを築き始めるという傾向があると考えられる（例 6）。

（例 5）　母語話者によるフロア内での先取り
（学習者 C2 が自分のいる大学は学部のことを重視するので学部より大学院の授業が少ないという発話を構築している途中で、母語話者 J2 は割り込んでいる。）

**1C2：　うちの大学は大学院より大学時代を重視し、大学時代より授業もえ：［ -**
**2J2：　　［ああ授業は少ないよね。**
**3J2：　授業は少ないけど質がね、質高いしね。**
**4C1：　少ないですか↑○○大学はめっちゃめっちゃ多いんですよ。**

1C2 が「大学時代より授業も」という発話文の主部を産出した後で、「え」というフィラーを使い、その後の発話を考えているところで、2J2 は言語ホストとして「ああ授業は少ないよね」と先取りして、C2 を補助し、発話を完成している。しかし、J2 の割り込みによって、C2 の発話は中断されてしまった。その後、学習者 C2 は発話の継続を諦めて、ターンを J2 に譲った。このように J2 が C2 を助けようと割り込んだが、その割り込みによって C2 の発話を妨害してしまった。

（例 6）　学習者による述部での「新たなフロアを築く割り込み」
（J2 が自分が大学院に入った時の感じを述べた後、J1 が「すごい選ばれて」

と J2 が高い競争率に勝ち残ったことを褒めようとするところで、5C2 は割り込んでいる。）

**1J2：** **｛え入るときにどうしてもこれが研究したいっていう感じで来ましたが｝えなんかわたしぜんぜんそんなんなくてなんかなん‐なんとな：く来ちゃった感じなんでな**

**2J1：** **えでも｛受験者数が｝すごい多かったんじゃないですか。**

**3J2：** **多かった。**

**4J1：** **↑えじゃあすごいえば‐選［ばれて、**

**5C2：** **［全部でごじゅ‐53 人でしたっけ、そのうち留学生だと半分ぐらいでした。**

**｛　｝の内容は筆者が還元したものである**

5C2 は 4J1 による J2 を褒めている発話の述部を聞かずに受験者数の内訳という発話で割り込んで、4J1 の発話を中断させている。それについて、割り込まれた話者 J1 に確認したところ、J1 は「恐らく C2 が 2J1 の『でもすごい多かったじゃないですか』という発話の真意（J2 を褒める発話の前提である）を理解できなかった」と答えている。このように、そもそも C2 は J1 の発話を補足しようと試みたが、先行発話の真意を理解できないため、先行話者の発話を妨害してしまった。

### 4. 4　割り込み後の会話の調整

割り込み後の会話の調整について、「割り込み後の結果」と「その後のターンの移行」の 2 つの観点から考察する。割り込みが起きた後の結果について、「割り込み話者も割り込まれた話者も各自の発話を中断せず発話を並行する（影響なし）」「割り込み話者の発話が中断される（割り込み話者中断）」「割り込まれた話者の発話が中断される（割り込まれた話者中断）」「割り込み話者も割り込まれた話者も発話が中断される（両方中断）」の 4 つが挙げられる。また、割り込み後のターンの移行について、「割り込み話者がターンを取る」「割り込まれた話者がターンを取る」「第三話者がターンを取る」の 3 つが挙げられる。母語話者が割り込む場合と学習者が

割り込む場合の会話の調整を表 6 に示す。

**表 6**　割り込み後の会話の調整

| 割り込み話者 | 出現頻度（%） | 割り込みの影響による結果（%） | | | その後のターンの持ち主（%） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 母語話者 | 55（100%） | 影響なし 25（45.45%） | 補足 | 13 | 割り込み話者 8（14.55%） | 新情報の提示 | 5 |
| | | | 評価・感想 | 8 | | 補足 | 2 |
| | | | 先取り | 2 | | 質問確認 | 1 |
| | | | 新情報の提示 | 2 | | | |
| | | 割り込み話者中断 3（5.46%） | 新情報の提示 | 2 | 割り込まれた話者 34（61.82%） | 先取り | 11 |
| | | | 質問・確認 | 1 | | 補足 | 11 |
| | | 割り込まれた話者中断 25（45.45%） | 先取り | 8 | | 評価・感想 | 6 |
| | | | 新情報の提示 | 5 | | 質問・確認 | 5 |
| | | | 質問・確認 | 5 | | 新情報の提示 | 1 |
| | | | 補足 | 4 | 第三話者 13（23.63%） | 評価・感想 | 5 |
| | | | 評価・感想 | 3 | | 新情報の提示 | 4 |
| | | 両方中断 2（3.64%） | 新情報の提示 | 1 | | 補足 | 4 |
| | | | 先取り | 1 | | | |
| 学習者 | 73（100%） | 影響なし 28（38.36%） | 新情報の提示 | 10 | 割り込み話者 28（38.36%） | 新情報の提示 | 24 |
| | | | 補足 | 7 | | 質問確認 | 2 |
| | | | 先取り | 7 | | 補足 | 2 |
| | | | 質問確認 | 2 | 割り込まれた話者 32（43.83%） | 先取り | 10 |
| | | | 評価・感想 | 2 | | 新情報の提示 | 9 |
| | | 割り込み話者中断 7（9.59%） | 新情報の提示 | 6 | | 質問確認 | 6 |
| | | | 質問確認 | 1 | | 補足 | 4 |
| | | 割り込まれた話者中断 30（41.09%） | 新情報の提示 | 18 | | 評価・感想 | 3 |
| | | | 先取り | 7 | 第三話者 13（17.81%） | 新情報の提示 | 7 |
| | | | 質問確認 | 3 | | 先取り | 3 |
| | | | 評価・感想 | 2 | | 補足 | 2 |
| | | 両方中断 8（10.96%） | 新情報の提示 | 8 | | 評価・感想 | 1 |

表 6 から、次のことが分かる。

（1）　母語話者が割り込み話者である場合、割り込みが生じた後、「影響なし」（45.45%）と「割り込まれた話者中断」（45.45%）は最も多い。その後のターンの持ち主が割り込まれた話者である場合は 61.82%で

最も多い。それは母語話者による割り込みは主に「補足的な発話」「評価・感想的な発話」などのような発話で、そのような割り込みは割り込まれた話者のフロア内で、補助的な役割を果たして、割り込まれた話者からターンを奪うための発話ではないためであると考えられる。

(2) 学習者が割り込み話者である場合、その後のターンの持ち主が割り込まれた話者である場合は43.83%で最も多い。その場合の割り込み発話が主に「先取り」「新情報の提示」「質問・確認」である。そのことから、学習者(上級)は割り込みによって、先行話者とともに会話の展開を進めていくことができると考えられる。

## 5. 終わりに

以上は接触場面における割り込みについて分析した。割り込みの位置については、母語話者による割り込みは「述部」に集中しており、学習者による割り込みは「主部」と「述部」に集中している。割り込み発話の機能については、母語話者の場合は「補足」「評価・感想」「質問・確認」「先取り」のようなフロア内での割り込みの頻度が高い。学習者の場合は「新情報の提示」のような新たなフロアを築く割り込みの頻度が高い。割り込み後の会話の調整について、母語話者が割り込み話者である場合、割り込みが生じた後、「影響なし」と「割り込まれた話者中断」が最も多い。その後のターンの持ち主は割り込まれた話者である場合が多い。学習者が割り込み話者である場合、その後のターンの持ち主は割り込まれた話者である場合が最も多い。その場合の割り込み発話は主に「先取り」「新情報の提示」「質問・確認」である。

割り込みは単に会話進行中のトラブルだけではない。母語話者による「フロア内での割り込み」は相手の発話を促進し、会話を盛り上げる役割もある。しかし、このような割り込みは学習者に十分に理解されていないことがある。学習者に対するフォローアップ調査では母語話者の発話の意味について全員85%以上理解できると答えている。しかしながら、学習者が母語話者の発話の真意が理解できないため、母語話者の発話を補足しようと割り込んだが、その割り込みによって母語話者の発話が妨害されてし

まうこともある。このように、学習者は相手の発話の途中で、適切な位置で適切な発話で割り込んで先行話者の発話を進めるストラテジーがまだ足りないと考えられる。以上のことから、上級日本語学習者のターンテイキング能力を高めるために、さまざまな会話ストラテジーを教える必要があると考えられる。例えば、相手が発話によって遂行しようとする言語行動を十分に理解した上で、適切な場所とタイミングで自分の話を持ち込む手段や他人に割り込まれた後、自分の発話を再開するために、適切なタイミングでターンを取り戻し、相手に割り込まれないように自分のターンを維持する言語手段などを検討する必要がある。

本研究は位置と機能から接触場面の会話における割り込みについて分析を行った。その結果はただ今回の調査データに限られるものである。割り込みの特徴を考察する場合、 会話の話題、 会話参加者間の上下や親疎関係、性別、経歴、個人差などのものを無視するわけにはいかない。今後は会話参加者の上下・親疎関係、性別などの要素を含めて、日本語母語場面と接触場面における割り込みの特徴を検討する。また、割り込みが生じた後で、会話参加者が如何にして会話を調整するかというプロセスを考察する必要がある。

## 注

1)　ターンの構成単位について、榎本（2008）は「文、節、句、単語などさまざまなタイプの単位からなる」と指摘している。本研究では一人の話者が 1 つの言語行動を遂行するために話し始めてから話し終わるまでの文の集合を一つのターンとする。

2)　共―成員性に関して、串田（2006）では、それを「会話者たちは、互いに同じカテゴリーの担い手」であることと定義している。

3)　その割り込み発話によって、先行話者の発話を中断する場合もあり、割り込み話者と先行話者とともに発話を並行して産出する場合もある。 また、 杉戸（1987）は「実質的な発話とは実質的な内容を表す言語形式を含み、判断、説明、質問、回答、要求など事実の叙述や聞き手への働きかけをする発話を指す」と指摘している。

4)　本研究では杉戸（1987）でいう「あいづち的な発話」（「ああ」「うん」「そう」のような応答詞を中心とする発話）は考察の対象外とする。

5)　「重なり」は次の三つの場合がある。① 同時発話による「重なり」; ② 一人の

話者が話している途中でもう一人の話者は発話を挿入し、二人の発話が重なっている；③ 一人の話者が話している途中でもう一人の話者はあいづちをうち、二人の発話が重なっている。そのうち、② は本研究が提示する「割り込み」に属している。

6） 本研究は発話文を認定する際に宇佐美（2007）で提示している基準に従う。

7） 本研究の会話例について、最初の数字「1」は話し手の当該会話の発話順序を表し、次の「J」は日本語母語話者（C は中国人日本語学習者）を表し、「1」は被調査者の識別番号を表す。

## 参考文献

生駒幸子（1996）「日常会話における発話の重なりの機能」『世界の日本語教育』6号、国際交流基金日本語国際センター、185–199 頁。

宇佐美まゆみ（2007）「BTSJ：基本的な文字化の原則について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成 15–18 年度科学研究費補助金基盤研究 B（2）（研究代表者：宇佐美まゆみ）研究成果報告書、1–3 頁。

榎本美香（2008）「会話・対話・談話研究のための分析単位 —— ターン構成単位（TCU）——」『人工知能学会誌』23 巻 2 号、265–270 頁。

串田秀也（2006）『相互行為秩序と会話分析：「話し手」と「共－成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社。

木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり —— 母語場面と接触場面の会話について ——」『日本語科学』11 号、国立国語研究所、115–134 頁。

杉戸清樹（1987）「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相：座談資料の分析』、68–106 頁。

高原脩・林宅男・林礼子（2002）『プラグマティックスの展開』、勁草書房、153–158 頁。

中井陽子（2006）「会話のフロアーにおける言語的 / 非言語的な参加態度の示し方 —— 初対面の日本語の母語話者 / 非母語話者による 4 者間の会話の分析 ——」『講座日本語教育』42 号、早稲田大学日本語研究教育センター、25–41 頁。

藤井桂子・大塚純子（1994）「会話における発話の重なりについて：協力的側面を中心に」『言語文化と日本語教育』8 号、1–13 頁。

藤井桂子（1995）「発話の重なりについて：分類の試み」『言語文化と日本語教育』10 号、13–23 頁。

俣野夕子（1996）「接触場面における話者交代」『阪大日本語研究』8 号、87–106 頁。

町田佳代子（2002）「初対面の会話における発話の重なりの効果」『北海道東海大学紀要』15 号、人文社会科学系、189–210 頁。

好井裕明・山田富秋・西阪仰（1999）『会話分析への招待』世界思想社。

劉佳クン（2011）「会話における割り込み発話についての考察――日本語母語場面と中国語母語場面の対照研究」『小出記念日本語教育研究会論文集』19 号、39–55 頁。

Edelsky, C.（1981） Who's got the floor? In Tannen. D. *Gender and Conversational Interaction*. Chapter 8（pp. 189–227）. Oxford Studies in Sociolinguistics.

Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G.（1974） A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation, *Language*, 50（4）, 696–735.

Tannen. D.（1984） Analyzing talk among friends. In *Conversational Style*（pp. 171–182）. Ablex Pub. Corp.